



少年の日の思い出

松井圭介
地球科学系講師

九月病？

9月が始まった。プロ野球はペナントレースの大詰めを迎え、シドニーでは今世紀最後のオリンピックが開催される今年の9月。酷暑もやわらぎ、虫の音が心地よく感じられる秋の到来を、世間の人たちの多くは心待ちにされていたに違いない。しかし筑波大学に務める我々、いや少なくとも私にとっては、9月の声を聞くと「やれやれ、また始まったか」との感が強い。「もう授業か」と。

最近の学生は一般的に、非常に真面目である。担当する講義に恐る恐る行ってみると、1限にも関わらず多くの学生が所在なさげに席に着いている。思わず目の前がクラクラし、「授業に出席するだけが勉強じゃないんだよ」と逆ギレしそうになるのを必死でこらえ、おもむろに講義を開始する。これが私の9月である。

もっとも私は、講義が嫌いなわけではない。大好きだという用語がある(もっ

とたくさん担当せよといわれても困る)が、自分なりに熱心に取り組んでいるという自負はある。しかし、やり残した宿題の多さに憂鬱となり、悶々として迎えた9月1日というトラウマを引きずっているのか、現在でも9月の声を聞くと陰鬱になる。

図工の悲しさ

私は小・中・高の学校教育を首都圏近郊の公立学校で受けた。凡庸で特段取り柄もなく、さりとて問題を起こすわけでもなく、学校の先生にとっては誠に扱いやすい生徒であったらと思う。得意と胸を張れる科目はなかったが、苦手な科目はたくさんあった。その第一が図画工作(図工)である。

図工とは紙を絵具で汚したり、粘土で手が臭くなったり、彫刻刀でケガをする科目と理解していたが、本当に何をやっても自分が情けなくなるほど下手だっ

た。わけても写生会の苦痛は筆舌に尽くしがたい。私はどうしても、目の前にある対象を、2次元である紙の上に再現できなかった。先生もしきりに同情して「目に見える通りに描けばいいのよ」とおっしゃるが、それができれば誰も悩みはしないのである。

絵具の色使いも私を悩ませた。私の絵では、どんな樹木でも緑一色の針葉樹に見えた。本物らしく見せようと、枝を描いたり、紅葉した葉っぱを描いたりしようものなら、それは何人たりとも樹木とは認識し得ない、不思議なオブジェの様相を呈するのである。空と水面の区別を塗りわけるのは、もはや絶望的であった。晴れた日に、木立が林立する公園の池を描写するなどといった神業はこの世のものとは思われなかった。

写生会の作品は、教室の外に貼られるのが常であったが、私の抽象画はまわりの友達の優越感と深い同情心を育むのに相当の寄与をしたはずである。この図工は、中学生になっても美術と名を変え、私を苦しめ続けた。美を学ぶべき尊い時間に、私は恥の感覚とそれを笑い飛ばす術を学んだのであった。

水泳の恐怖

図工はまだ良かった。水泳の場合は苦

痛どころではない。それは恐怖の時間であり、空間体験であった。泳げない人間にとって、水泳の所作は、身体を水没させ、水中でもがき苦しむ所作に他ならない。死を覚悟する行為である。私は顔が水に濡れるのが生理的に我慢できなかった。高性能のゴーグルなどなかった時代である。学校の水泳のプログラムは、「けのび」「バタ足」「面かぶりクロール」「クロール」の順だった(と記憶する)。顔を水に漬けることが苦手な私は、ようやく「面かぶりクロール」まで到達したが、とうとう息継ぎは体得できなかった。私の水泳とは、目をぎっちりつぶって、大きく息を吸い込み、その息が続く限り前進するというものだった。25m先の壁が本当に遠くに感じられた。私がなんとか泳げるようになったのは、高校時代に平泳ぎを授業で特訓された時である。顔を過度に水没させずに済む平泳ぎは、背泳とともに私には合った泳法であった。なぜ小学校の時にこれを教えてくれなかったのか、と今でも思う。

思えば小学校時代、4時間目にプールだと思うと、1時間目から沈鬱であった。さりとて授業をサボるという知恵などない健康優良児は、毎夏、ただひたすらに「プールが壊れますように」と祈っていた。

教えることの難しさ

そんな私だったが、学校嫌いになることもなく、無事に小学校を卒業した。当時の私は、学校の先生は絶対だと信じていた。中学校に入ったとき、英語の先生は辞書にあるすべての単語を知っているものと確信していた。そして社会の先生だったら、地理、歴史、公民一般の全てを理解しているのだと。しかしかに鈍い中学生であっても、それは幻想に過ぎないことが次第にわかってくる。「この先生にはこれより難しいことは聞いてはいけない」といった感覚が身に付いてくると、それまで盲信していた図工や体育の先生にも、懐疑の念が生じてきた。

考えてみると、図工では「絵を描きなさい」とはいわれても、具体的に「どのように描けばいいのか」「どの色を選択し、どういう風に塗ればいいのか」を教えてもらった記憶がない。技法も知らずただ闇雲に描いて、評価だけされていたのではないか、という不信感が芽生えたのである。プロならプロの技を伝授して欲しいという願いである。

体育も然り。サッカーやバレーボールなどといった楽しい球技系の種目は、生徒と一緒にあって率先してプレイするのは、マラソンの時間になると決まって、ストップウォッチを片手に「あと10周

とか「ほら、頑張れ」といったコーチ役に徹する先生が多かった。一日に何時間もある授業で、毎時間走っていたら身体がもたないのだろうか。ただ伝統ある本学の名誉のために付け加えるが、私の習った先生方はみな他大学の出身者であった（ように思う）。

教員になって

かくいう自分も何の因果か教員になった。地理学を専攻している関係上、講義の中で外国の生活や文化についても触れることも多い。中には当該国で何年も暮らした経験のある学生もおり、いつも冷や冷やしている。教えることによって、自分の知識不足や説明のいたらなさを反省させられることもしばしばだ。

個々の学生の卒論指導でも、果たしてどのくらい有効な指導ができているだろうか。8月の中旬頃からは、就職活動では人間の尊厳を傷つけられ、卒論は全く進展せずにS.O.S.を発した学生たちが、次々と研究室に駆け込んでくる。しかし無情にも私は、そんな彼（女）らに対し、「まあ、苦しいのはみんな一緒だから頑張りなよ」とか、「もっと自分で計画を立てて、ガンガン 調査を進めて行かなくてはダメだよ」などと、長島監督もおどろく精神論をぶって学生を叱咤している

のである。かわいそうな学生たち。

一般の大学改革の行末は未だ不透明であるが、筑波大学は研究重視の姿勢をより鮮明にしていく気配である。私自身は、教育にも全力を投入しようという意欲も

気力も十分あるのだが、実際に学期が始まると、カレンダーをみてため息をついてしまう。「今学期、○曜日は×回も授業があるのか」。

(まついけいすけ 人文地理学専攻)

